人生二毛作

大宮知信

おおみや・とものぶ　ノンフィクション・ライター。1948年、茨城県生まれ。中学卒業後、東京下町のネジ販売会社に集団就職。ギター流し、週刊誌編集者など二十数回の転職を繰り返し、現在に至る。政治、経済、社会問題など幅広い分野で執筆。『平山郁夫の真実』（新講社）など著書多数。

パソコン水彩画で第2の人生をエンジョイ

パソコンで静物画や風景画などの絵を描く。大熊勇雄（いさお）さん(66)は、このパソコン水彩画教室の講師が仕事。カバンからiPadを取り出して、実際に描いてみてくれた。

「作品は絵手紙にして人に送ったり、額縁に飾ったりして楽しめます」

前職はソフト開発会社で教育用コンテンツを企画するプロダクトマネジャー。景気の悪化で会社が勧奨退職者を募集したのを機に、57歳で早期退職。「再就職する気はなかった。好きなことをやろう」と、仕事は自分でつくり出すことに。退職後、財団法人ニューメディア開発協会が推進する「シニア情報生活アドバイザー」の資格を取得。ここから仕事のネットワークが広がっていった。パソコン水彩画の仕事もシニア支援の活動がきっかけ。

会社を辞めて2カ月後、「NPO法人の仲間に、大熊さん、パソコンで絵を描くことができないかといわれて、あ、そうか」と自分の得意技に気が付いた。セミプロの画家だった兄の影響を受け、子供の頃から絵は好きで描いていた。

「私は旅行が好きなので、旅行を楽しんだ後、現地で描いたスケッチをパソコンで整理して、旅の感動を人に伝えるシニア向け講座をやったらどうかと。それからお絵描きソフトを買って練習しました。何十枚も描いて、これなら教えられそうだなということで、テキストを作って本格的に始まったわけです」

シニアの生きがいづくりに力を尽くす大熊勇雄さん

2003年に横浜市保土ケ谷区に「パソコン水彩画教室」を開設し、講師業をスタート。「現在、生徒は6人。80過ぎの女性もいます。ここの教室は1コース3カ月6回で受講料は1万2000円ですから、計7万2000円入るわけです」。東京・四谷のシニアライフ支援団体が主催するパソコン水彩画教室でも教えている。こちらは若干の謝礼と自宅がある横浜からの交通費が出る。

「パソコン水彩画を教えるほか、商店街の絵を描いてくれとか、HPを作ってほしいとか、ちょこちょこと仕事があります。年金もあるし、毎年1回は妻と海外旅行に行ってます。ぜいたくはできないけど、ま、何とかやってます」

もう1つ仕事がある。大熊さんのセカンドライフの原点となったシニア情報生活アドバイザーの仲間を増やし、シニアの生きがいづくり、活動の場を開拓することだ。大熊さんが代表を務めるNPO法人「シニアSOHO横浜・神奈川」でシニア情報生活アドバイザーの養成講座を開いている。定年後、何をしたらいいのかわからない人は、受講するのもいいかもしれない。

一緒に卒業旅行に行ったはずなのに…

の5人組

坂道

高校時代の仲良し5人組で集まることになった。私以外は、全員関西在住なので、舞台は大阪。何年かに1度は個別にそれぞれと会っていたのだが、グループ5人全員が一堂に会するのはなんと卒業旅行以来、[illegible]

っかりもののA子の仕切りで、夜景の綺麗なレストランで夕食。D子だけは、家庭の事情で、翌日のランチ集合となったので、まずは「ら」と肩を叩いてくれると、すかさず、一番記憶力のすぐれた（本当に早押しクイズのようにすべてのエピソードを即答してくれる恐ろしい女）A子が、「私が稗田阿礼となって、全[illegible]

きつく、こういう話し方をする）とのたまうではないか。おお、同士よ。

D子の記憶喪失ぶりは、私以上で「へ？　わし、何組じゃったっけ？」「担任って誰じゃろう」の世界。揚げ句の果てには、「そうそう、××クンってスポーツ万能の同級生がいたやん。その息子さんがいま、高校野球の強豪Q校の[illegible]

白川道